髪をつめたくぬらしています。気ばかりあせるのですが、からだが思うように動きません。

ふり返ると、今まで住んでいた家も、女学校の校舎も、真赤な炎につつまれています。幼いころの会津の街の炎が、心にだぶってうつります。鳴りひびく鐘の音は、近くの半鐘の音か、お城の早鐘の音か、逃げまどう人々の群れ、炎――ようやく助けられて、知りあいの家にたどりついた賤子は、夢をみているようでした。

それから数日、賤子の病気は、やや、もちなおしたようにみえる日もありました。避難先の知りあいの家で、賤子は、もう誰にも会おうとしませんでした。夫と二人きりでした。夫と二人だけでいられるなんて、七年間の結婚生活のうちで、初めてのことのように思われます。

「私が死んだら、親しい人にだけ知らせてください。伝記などは、ぜったい書